

歌謡を通じて知る八重山の自然世界

公開講演会「八重山歌謡に見る動植物の世界と人の暮らし」開催の報告

栗原 健

2025年春には、沖縄の海を愛する人々にとって嬉しい知らせがありました。久米島の沖合で4月29日、元気に泳ぐジュゴンの姿が確認されたのです。2007年以降に沖縄周辺で確認されたジュゴンは僅か3頭しかおらず、6年ぶりにその生存が確認された意義は大きいです。とはいえ、温暖化の影響により各地でサンゴの白化が急速に進行するなど、ジュゴンをはじめ南島の生き物たちを取り巻く状況は厳しさを増しています。豊かな海を守り続けるために、環境意識の一層の向上が求められます。

このため、宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所の共同研究「南島における民族と宗教」は、2025年度は特に沖縄の自然世界に注目することにしました。このテーマに沿って11月15日(土)午後、大学で公開講演会「八重山歌謡に見る動植物の世界と人の暮らし」が開催されました。講師は、本学とつながりが深い琉球大学名誉教授の山里純一氏、前仙台市吉成市民センター館長で『ホロホローの森の生きものたち：沖縄島南部のネイチャー図鑑』等の著者である奥土晴夫氏、八重山古典音楽安室流保存会教師である山田たかね氏です。31名の参加者は、八重山の自然環境や生態系システムに関する詳しいプレゼンテーションを聞いた後、三線の音と共に歌われる歌謡に耳を傾け、島の生活と生き物たちのつながりに思いを馳せました。

当日取り上げられたのは、「鷺ぬ鳥節」「鳩間節」「桃里節」「石ぬ屏風節」「あがろーざ節」「命果報ユンタ」「こいなユンタ」「まるまぶんさん節」「とうがにすぎー節」「月ぬ美しゃ」「網張のみだがーまユンタ」「やぐじゃーま節」「ぺんがん捕れー節」「みなとーま節」。いずれも八重山の島々の動植物や美しい風景を生き生きと歌い込んだ歌謡です。

これらの中で、特にユーモラスな内容で会場を沸かせたのが、ラムサール条約湿地である石垣島の名蔵アンパルを舞台にした「網張のみだがーまユンタ」でした。ツノメガニの生年祝いのために浜に棲むカニたちが集まって来て、めいめい宴会係として場を盛り上げるといふ光景を歌ったものです。「びんぎゃーかんや 笛吹くい人数、ぎがらんかんや 太鼓人数、むみんぴくいかんや 三味線人数、やぐじゃーまかんや 踊るい人数（キンセンガニは笛吹係 タイワンガサミは太鼓打ち係 オキナワハクセンシオマネキは三線係 ヒメシオマネキは踊り係）」というように、14種類の蟹たちがその身体の動きをもとに役割をふられており、浜辺の生き物に対する人々のあたたかな眼差しがうかがえます。

続いて歌われた「やぐじゃーま節」も、蟹が歌ったり三味線を弾く様子を想像した古謡ですが、後半では、漁の獲物にされて爪を折られることを恐れる蟹の心情が歌われます。

講演では、漁火に震える蟹の姿には、権力者によって苦しめられて来た八重山の農民たちの思いが仮託されている可能性についても言及されました。一見素朴な言葉の裏にも、民衆の苦しみが見え隠れします。

とはいえ、明るく遊び心にあふれた歌謡からは、そうした辛苦を跳ね返す人々の強靱さも伝わって来ます。「くいなという鳥を、どのように捕まえればよいか」「網を立てれば取れる。罾を仕掛ければ取れる」「網を立てても、罾を仕掛けても取れなかったぞ」と歌って行く「こいなユンタ」は、「コイナ」「マタコイナ」と繰り返される掛け合いが愛らしく、心に残りました。夏の花の間に見え隠れするくいなは、恋の象徴だったのでしょうか。

美しい三線の音と歌声に魅せられて、3時間の講演時間はあっという間に過ぎました。参加者の1人は、アンケートにこのように記しています。「直接三線と生歌を目と耳にしながら八重山歌謡の内容（動植物や歌詞）にふれることができる…こんな稀有な機会が得られたことに感謝です。八重山の人々が動植物の生態をふだんからよく見知っていたからこそ、擬人化でき歌とした。その人と自然の近さ、愛しみ方が歌いつがれてきたので、歌にだけ残ってしまうだけでなく、この生態が目に見えるように八重山（沖縄）の自然を保つ努力をしなければならぬと痛感しました。」竹富島の「命果報ユンタ」が示すように、多くの命をやさしく包み込む南島の自然がこれからも守られることが、「吾等皆命島とう共ていある願い」です。

※八重山の蟹を歌った歌謡については、本誌収録の山里純一氏のエッセイ「八重山歌謡に見える蟹」に詳細があります。ご覧下さい。